

國學院大學學術情報リポジトリ

教員養成課程の学生に対する読譜の指導について：
読譜力を獲得するための実践的手法(2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高山, 真琴 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001265

教員養成課程の学生に対する読譜の指導について

—読譜力を獲得するための実践的手法 2—

高山 真琴

【キーワード】

聴く 歌う 書く 読む 弾く

はじめに

2012年に初等教育学科の1年生を対象に実施した読譜に関する項目別調査¹⁾によると、読譜を得意としないとする学生の内、音価について「少し分かる、分かる」と回答した学生は54.7%、音高について「少し分かる、分かる」と回答した学生は75.5%であった。この数値は、楽譜を読み解く上で必要な知識はあるが、楽譜を読めることにはつながらない、という学生の意識を反映させたものと言える。

読譜力について緒方(2010)²⁾は、「五線譜に表された音楽情報を読み取ることができるという知的能力」と「音楽を楽譜から視覚的に捉えて、階名で歌唱したり楽器で演奏したりできる能力」のふたつの側面があるとしている。拙著「教員養成課程の学生に対する読譜の指導について・読譜力を獲得するための実践的手法 1」³⁾では、緒方の言うところのふたつの側面を同時に獲得していくための実践的手法を、〈リズムと拍子の捉え〉に限定して論じた。

音楽は、音高と音価を表す一つ一つの音を繋げて顕されるものである。音楽を楽譜に顕在化するということは、音高の推移と、強拍と弱拍を規則的に循環させることで音楽の流れを導き出す拍子を物差しに、音価の組み合わせであるリズムを表すことである。読譜という行為は、この〈音高の推移の把握〉と〈リズムと拍子の捉え〉が同時になされることであるが、音楽を捉えるためのソルフェージュ的トレーニングを経験したことの無い学生にとって、音高を判別することとリズムを捉えることを同時に行うことは非常に困難である。両者はまず、別個にトレーニングしながらそれぞれの力を育成し、段階的に、螺旋的に両者を同時に活用できるようトレーニングを繰り返していくことが望ましい。

本論では〈音高の推移の把握〉のための基礎的トレーニングについて授業実践例を示しながら、教員養成課程の学生に対する読譜力の定着につながる指導法について考察する。

1. 知識と体験を読譜力に結びつける実践的手法〈音高の推移の把握〉について

読譜に不慣れな学生が記譜された音を読み繋いでいく場合、記されたひとつひとつの音名を、一点ハから音階を辿るように探していく方法をとることが一般的傾向として見受けられる。個々

の音を定点から測り調べるこの方法では、音名は探り当てたとしても、推移する音を繋がりとして把握することは困難である。これがまさに学生が指摘する「知識はあっても楽譜が読めるとは言い難い」状態である。定点に戻ることなく音から音へ読み繋いでいける様にするには、隣接する音との音程を素早く掴めるようになることが必要であると考えられる。

楽譜は音を可視化して表したものであるが、その楽譜を読むトレーニングを行う上で、視覚的に音を確認できる鍵盤楽器を用いることは、有効な一手段であると考えられる。幹音が並ぶ白鍵に黒鍵を挟み込み、隣接する音と音すべてが半音の音程に整えられたものが、ピアノ、オルガン、鍵盤ハーモニカ、木琴、鉄琴等の鍵盤楽器である。鍵盤を右方向に押さえて、あるいは打ってあげればより高い音が出て、左方向に押さえて、あるいは打ってあげればより低い音が出るといった音を可視化できる点、また、鍵盤を押さえる、あるいは打つだけで常に定まったピッチの音が出る点、また、旋律と和声と同時に奏することができ、音楽の姿を楽器一台で表現しきれぬ点からも、教育楽器として使われる頻度が高い。この鍵盤楽器の使用も考慮に入れ、音高の推移を視覚と聴覚の両方から捉えるための基礎的なトレーニングの実践例を次に示していく。

（1）幹音を捉えるトレーニング

教科書に掲載されている楽曲や子どもの歌の音域は、概ねイから二点へまでである（譜例1参照）。この音域にある幹音間の音程、換言するとハ長調の音階の音程関係に慣れるため、次のトレーニングを行う。

譜例1 子どもの歌の音域にある幹音



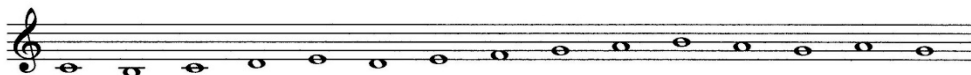
〈実践例〉

- ① 譜例1を見ながら、一点ハから順次上行して二点へまで登り切ったら、即順次下行してイまで降り、再び上行して一点ハで終わるまでを1パターンとし、教師の音名による範唱に続いて学生は聴唱する。その際、教師は歌っている音を指揮棒等で指し示しながら、実音と譜面上の音、つまり聴覚で捉えた音と視覚で捉えた音が一致するよう働きかける。
- ② ①と同様に教師の範唱に続いて一点ハから順次下降してイまで下がったら、即順次上行して二点へまで登り、再び下降して一点ハで終わる。
- ③ 鍵盤楽器を用いて①及び②のトレーニングを行う。その際、一点ハから始めることと、鍵盤を押さえながら同時に音名で歌うことを指示し、実音を譜面上と鍵盤上で捉える感覚を鍛える。
- ④ 一点ハ以外の音から歌い始めることも試み、音階の音の並びに十分慣れる。

（2）2度音程を捉えるトレーニング

幹音間の音程構造を聴唱及び視唱することで十分経験したのち、隣接する幹音を正しく歌うトレーニング「音リレー」を行う。学生は自身の隣に並ぶ学生が歌った幹音の2度上か2度下の音を歌い、次々と幹音を歌い繋いでいくことをルールとする。

譜例2 2度音程獲得のための「音リレー」例



〈実践例〉

「音リレー」1回目

- ① 学生は円になって並び、始まりの音を出す学生を決める。
- ② リレーの始まりの音は学生が選び、教師が実音を範唱して与える。
- ③ 音リレーを進めながら、教師は学生が歌った音を範唱し、音程が不確実な学生には教師の声に唱和するよう促す。

「音リレー」2回目

- ① クラスを歌うグループと記譜するグループに二分する。
- ② 歌うグループは1回目の要領で「音リレー」を行う。記譜するグループは、歌うグループが歌う音を、一人ずつ交代で五線ボードに記譜していく。譜例2のようにリレーの軌跡が記される。
- ③ 歌うグループが全員リレーし終わったら、歌うグループと記譜するグループを交代する。
- ④ それぞれのグループが記譜した楽譜を見ながら全員で歌う。教師は一音毎に和音伴奏を入れ、ハ長調の調性感を示す。

「音リレー」まとめ

「音リレー」2回目で音を五線上に記す作業は、音高の推移が2度の上下方向の動きに限定されることがヒントとなり、記すべき音が五線に貫かれるのか、間に納まるのかを慎重に考えながら行われた。符頭の書き方については、形は右肩上がり楕円形にすること、符頭の高さは間の幅が基準となることを教師が予め示しておくので、一人ひとつではあったが、書く位置と形を意識しながら慎重に音符を書くことができた。「書く」という行為は、音符自体に、また楽譜についての構造的理解があって初めて可能となる。「音リレー」はシンプルな活動の中に、音を聴く、選ぶ、歌う、書く、読むという作業が含まれ、音を聴覚と視覚とで同時に捉えるための基礎的訓練として有用性の高いものであると言える。また、学生が音を選び歌う際には教師もその音を範唱するので、学生は自身の音程が不安定である場合、唱和することで正しい音程を自己修正することができるようになる。

（3）3度音程を捉えるトレーニング

3度音程の推移は、線に貫かれている音はそれに隣接する線に、間に納まっている音はそれに隣接する間に移行するというように、視覚的に捉えやすい。（譜例3、譜例4参照）幹音を捉えるトレーニングで音階の音の並びを十分体験しておくことで、3度音程は音階を1音跳ばして読めばよいことに気付く。3度音程の把握は和音を学習する際の基礎となるものでもあるので、視覚と聴覚のトレーニングを十分にしておくことが望ましい。

譜例3 3度音程獲得のための基礎課題1



譜例4 3度音程獲得のための基礎課題2



〈実践例〉

- ① 譜例1を歌い、音階の音を確認してから譜例3と譜例4を歌う。
- ② 鍵盤楽器を用いて譜例3と譜例4を弾きながら歌い、3度音程を実音と楽譜、及び鍵盤上で確認する。
- ③ クラスを2グループに分け、譜例1を第1グループの二音あとから第2グループが歌い始めるルールで、3度音程をハーモナイズする楽しさを味わう。この実践は音階固有和音を学ぶ基礎にもなる。
- ④ クラスを3グループに分け、譜例3を、歌い出しのグループに次ぐ2グループは、一音ずつ遅れながら歌い始めるルールで歌い進める。第3グループが始めの音を歌ったところで一端全体を止めて、三和音の響きを感じる。一音進む毎に三和音のハーモニーを確認し、長三和音、短三和音、減三和音の響きに親しむ。譜例4を用いても同様のトレーニングを試みる。

上述のようなトレーニングを継続反復して行うことにより、五線上に記された音が個別に素早く判別できるようになり、また音と音とのつながりの形も把握できるようになることが期待される。二音間の音程は、譜例5に見られる様に視覚的に把握しやすい特徴がある。この視覚的な特徴を捉えておくことで、読譜の際、音高の推移を音程の推移として捉え、音の動きの形を想像することも可能となってくる。

譜例5 音程の視覚的捉え



2. 読譜実践練習について

トレーニングによって培われた読譜の力は、実際に楽曲を読むことによって実証される。トレーニングには個別の目的があるが、トレーニングの成果を十分読譜に応用できることを学生自身が実感するためには、読譜練習用に用いる楽曲を吟味する必要がある。本論で示した「幹音を捉えるトレーニング」、「2度音程を捉えるトレーニング」、「3度音程を捉えるトレーニング」までを経験した学生に課す課題は、ハ長調であること、音が2度及び3度で概ね動くことを基準に選ぶ。教師が課題を創作する場合は、達成度の確認の意識を持ち、応用的な部分はあってもトレーニング目的に沿った課題制作を心がけるべきである。既成の楽曲を用いる場合は、課題の基準を満たすために、必要があればハ長調に移調する工夫があってもよいと考える。

次に、練習曲としての基準を満たす楽曲を、課題として用いる際の留意事項も合わせて示す。

課題曲1 〈かえるの合唱〉⁴⁾ 譜例6 使用音程 : 2度 3度



読譜をする場合、はじめに留意すべき点は「音符を読まない」ということである。一音一音の音の動きを確認する以前に、景色として音の動きを捉えることを提案した結果、学生はこの楽曲について次の様な点を指摘できた。

- ① 1小節目は音が順次上行して2小節目は音が順次下行している。
- ② 3小節目と4小節目も開始音は違うが1小節目、2小節目と同じ動きである。
- ③ 5小節目と6小節目は同音の連打が同じリズムで繰り返される。
- ④ 7小節目は、リズムは違うが1小節目と同じ音の動きである。

個々の音名にとらわれず、形として音の動きを追った学生の目に、楽曲の構造が明確に見えてきたことが分かる。音の動きのシンプルさも構造発見の一因ではあるが、このような楽曲の捉え方こそ、楽曲理解の基礎となるものであり、読譜というのはただ音を読むだけではなく、音の繋

がり、つまり音楽を捉える行為でもある、ということを学生は理解していく。

このような予備考察を行ってのち、音名で視唱を行うと、音程構造も既習のものなので、学生はスムーズに歌い繋げることができ、読譜に対する苦手意識が薄れていく。

課題曲2 〈フレールジャック〉⁵⁾ 譜例7 使用音程： 2度 3度 4度 5度



この楽曲の音高の推移には、3度、4度、5度音程が多く用いられていることと、音域が9度と広いため、2度と3度音程のトレーニングを行っただけの学生にとっては、応用力を試される楽曲であるとも言える。5小節目最後の一点ハから6小節目始めの一点トの音程は5度であるが、学生には両者が共に線に貫かれている点に注目させ、一点ハから3度、さらに3度上の音を取ればよいことを示唆する。また、構造的視点で見れば、6小節目は5小節目の繰り返しであるので、5小節目と同じに歌えば良いことを気付かせる。

この楽曲は、1小節目単位のモチーフが繰り返されて次のモチーフに移行し、また同様に繰り返しながら8小節目の楽曲を形成する。日本では特に、様々な歌詞で手遊び歌として歌われ親しまれているものである。読譜練習用としてハ長調で書かれているが、実音で歌うには音域が低いいため、移調して階名唱の練習をすることも提案したい。伴奏を伴って歌う歌、というよりは、実用性の高い、どこでも歌える遊び歌である。アカペラで、正しい音程間隔で歌うには、音程構造を正しく認識していなければならない。どの音から歌い始めても正しく歌えるようになるためには、音程という距離感を学生の中に育成することが必要となる。

課題曲3 〈よがあけた〉⁶⁾ 譜例8 使用音程：2度 3度 4度

この楽曲で注目すべきは4小節間の音高の推移である。1段目4小節と2段目4小節の音の動きは3度の幅を保ちながら平行に動いている。また、3段目4小節と4段目4小節も同様のことが言える。さらに、各段の1小節目から4小節目までの1拍目の音を拾い出し重ねてみると、1小節目はドミソ、2小節目もドミソ、3小節目はソレファ、4小節目はドミとなり、4小節ずつずらして輪唱した場合、美しいハーモニーを醸し出す曲であることが分かる。構造的視点で楽曲を見る場合、音の繋がりだけでなく、音の重なりにも注目する価値があることを認識したい。

音高の推移は2度及び3度の動きが大部分を占め、繰り返しの構造もあることから、20小節の長さながら読譜のしやすい楽曲である。反面、輪唱を試みることによって、他の声部を聴きながら自己の音程を正しく保つトレーニングができたり、声部を増やしての輪唱をした場合には、和声感を感じ取ることができたりと、教材としての可能性を多く含む楽曲でもある。

まとめ

音高読譜力を定着させる手段としては、中山（2013）⁷⁾が提唱するアットランダムに並んだ音列を読むことを定期的に継続して行う方法や、フラッシュカードを用いた方法などが先行して報告されている。これらの方法は、音高を反射的に捉えられるようになるためには有効な手段であるが、そのトレーニングに音楽的要素は含まれない。呉・桐山は、その著『リズムの基礎』（1969）の中で、「リズム練習において、くれぐれも注意すべきことは、長短の組み合わせの単なる機械的訓練と思わないことです。音の高低はなくても、リズムには必ず音楽的な表情やフレーズがあ

るはずです」として、リズム練習が音楽から離れた単なるトレーニングにならぬよう警告している。本論で示した〈音高の推移の把握〉のための基礎的トレーニングは、そのトレーニングを繰り返すことで、長音階の音程構造を視覚、聴覚の双方から捉えられるようになったり、音階固有の三和音の響きを認識できるようになることが期待できる。また、その力を実際の楽曲を視唱するトレーニングに応用すると、旋律を単なる音の羅列では無く、構造的な繋がりをもつ音楽として把握できたり、音の繋がりの中に和声感を感知出来るようになることも期待される。読譜における音高の推移を把握できる力は、五線上に記された音を正確かつ迅速に読み取るのみならず、音楽としての繋がりを見出す力として開発されるべきである。

読譜力の定着は読譜力の行使に繋がる。緒方（2010）が「読譜力を基礎的な音楽表現の能力」と表したのもここに起因する。視覚的に捉えたもの（楽譜）を聴覚的に再現すること（演奏）を、母語を読み、話すような感覚で行えるまでに読譜力が定着することを目指し、その力の獲得に向けての教材を、リズムと拍子の捉えと併せて継続研究中である。

注

- 1) 高山真琴「教員養成課程の学生に対する読譜の指導について—読譜力を獲得するための実践的手法 1—」『國學院大學人間開発学研究』第4号 平成24年 P.53参照
- 2) 緒方満『読譜力という基礎的能力 ～小・中学校と一貫して育む学力～』 P.10参照
- 3) 前掲高山真琴「教員養成課程の学生に対する読譜の指導について—読譜力を獲得するための実践的手法 1—」 P.51～P.59参照
- 4) 國學院大學幼児教育専門学校ピアノ指導担当編『ピアノ曲集Ⅰ～保育者になるために～』 P.20参照
- 5) 國學院大學幼児教育専門学校ピアノ指導担当編『ピアノ曲集Ⅰ～保育者になるために～』 P.20参照
- 6) 小林美実編『こどものうた200』 P.52参照
- 7) 中山由美「音高読譜力の実態と授業マネジメントに関する研究—小学校で習得できる音高読譜力と指導の留意点—」 日本音楽教育学会第44回大会（弘前大会）発表レジュメ P.38参照

参考文献

- ・小林美実編『こどもの歌200』 東京 チャイルド本社 2003年 第82刷
- ・『ピアノ曲集Ⅰ～保育者になるために～』 東京 共同音楽出版社 2006年 第2版
- ・『小学生の音楽 2』東京 教育芸術社 2013年
- ・緒方満『読譜力という基礎的能力 ～小・中学校と一貫して育む学力～』 東京 教育芸術社 2010年 第1刷
- ・呉暁・桐山春美『リズムの基礎』 東京 音楽之友社 1969年 第1刷
- ・中山由美「音高読譜力の実態と授業マネジメントに関する研究—小学校で習得できる音高読譜力と指導の留意点—」 青森 日本音楽教育学会第44回大会発表論文 2013年10月

教員養成課程の学生に対する読譜の指導について（高山）

- ・高山真琴「教員養成課程の学生に対する読譜の指導について―読譜力を獲得するための実践的手法 1―」『國學院大學人間開発学研究』第4号 神奈川 國學院大學人間開発学会 2013年

（たかやままこと 國學院大學人間開発学部初等教育学科准教授）